

長期研修派遣教員による在籍校への 行動コンサルテーションの効果（1）

—通常の学級に在籍する特別な教育的ニーズのある児童及び担任並びに支援員への教育的支援—

○松岡 勝彦 ・ 須藤 邦彦

（山口大学教育学部）

KEY WORDS: 通常の学級 担任及び支援員 公立小学校

I. はじめに

本研究では、長期研修派遣教員が大学教員と連携を取りながら、在籍校における児童及び担任並びに支援員への行動コンサルテーションを実施し、その効果と担任と支援員へのコンサルテーションのあり方についてもあわせて検討することとした。

II. 方法

1. 参加者

本研究には、公立 A 小学校に通う児童 1 名、その担任、支援員、研修教員、筆者の計 5 名が参加した。

1) クライエント

ADHD との診断を受けた B 君。授業中に大声を出す行動は本研究開始数ヵ月前から生起していたが、研究開始直前にそれが急増している旨、教師から改善要望があった。

2) コンサルティ（担任及び支援員）

新規採用 1 年目の教師 1 名と支援員 1 名の計 2 名。

3) コンサルタント（研修教員及び筆者）

研修教員は特別支援学級の担任経験 3 年、教職歴 16 年の教員。現在コンサルティと同じ小学校に在籍しながら、当該地域に設置された大学の教員養成系学部で特別支援教育の長期研修中。

2. インフォームド・コンセント（説明と同意）

学校長、担任、支援員、そして B 君の保護者に対して文書に基づいて説明を行い、関係者全員から上記のことについて同意し、本研究に参加する旨の回答を得た。

3. 標的行動

授業中に大声を出す行動を標的とした。なお、この行動について、研修教員が 2 日間にわたる行動観察を行ったところ、担任や支援員からの注目を得るために行われていることが推定された。

4. セッティング

B 君の在籍教室。研修教員は、必要に応じて他児の学習支援をしながら、自然な形で B 君の観察を行った。

5. 研究デザイン

本研究は、ベースライン、介入 1、介入 2、フォローアップの 4 フェーズから構成された。

7. 学校訪問期間

X 年 9 月～X+1 年 1 月。原則として「週 1 回、1 回につき 2 時間の授業（45 分×2 時限）」の訪問であった。

8. 手続き

1) ベースライン

授業時間中における標的行動について 3 時限測定した。担任と支援員には B 君に対して「普段通りに」対応してもらった。

2) 介入 1

支援員には、B 君が大声を出す行動に対して消去の手続きを取ってもらった（担任は従来通りの対応）。介入 1 は 4 時限実施した。

3) 介入 2

担任と支援員の両者に対して、大声を出す行動には消去、

学習参加行動には言語賞賛等の正の強化子を提示してもらった。研修教員は、担任と支援員に対して、授業終了直後に、例フィードバックを行った。

4) フォローアップ

ベースラインと同じ手続きで 4 時限測定した。

5) 事後インタビュー

担任と支援員に対して今回の取り組みの有効性、負担感、全体的感想についてインタビューを実施し、回答を得た。

III. 結果

本研究の結果を Fig.1 に示した。また、事後インタビューでは 2 名「B 君にとって有効であった」「負担感も感じられなかった」、さらに担任から「子どもの行動をよく観察し、問題行動が起こらないように防ぐこと」と、支援員から「問題が起こった時に、何がその子どもにとって必要なかを考えて支援していきたい」とのコメントを得た。

IV. 考察

本研究では、研修教員がコンサルタントとして、同一在籍校の担任と支援員へのコンサルテーションを行ったところ、Fig. 1 にも示した通りの結果を得た。このことから、今回の取り組みの有効性が認められ、あらためて複数の教員が指導を行う場合、同一の指導手続きを実施することの重要性が指摘された。また、担任と支援員の両者とも今回の取り組みについて負担とは感じておらず、今後の展開が期待された。同一在籍校の教員がコンサルタントを担う場合のメリットとして、当該児童及び同クラスの子どもの普段の様子が観察可能なこと、コンサルティに関する情報をすでに得ていること、行動観察やコンサルテーションに必要な時間を確保しやすいことなどが挙げられた。ところで、本研究期間中に、担任より「あとでデータを見て標的行動が減少しているのがよく分かった」旨の回答が得られていることから、やはりデータを取り、分かりやすく提示するとの必要性が示された。多忙のため担任が記録を取ることが難しい場合には、他の教員や管理職、あるいは学生ボランティアに依頼することも考えられる。

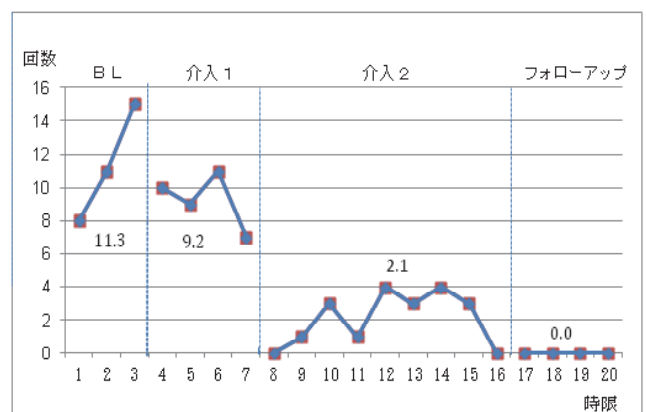


Fig. 1 授業時間における B 君の「大声を出す」行動の推移。

(MATSUOKA Katsuhiko & SUTO Kunihiko)